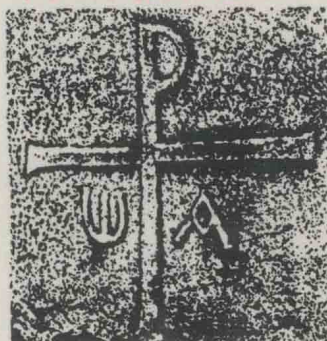


偉大なる忍耐・書簡抄

キプリアヌス 熊谷賢二訳

キリスト教古典叢書 6



上智大学神学部編
P. ネメシエギ責任編集
創 文 社 刊

偉大なる忍耐・書簡抄

キプリアヌス
熊谷賢二訳

上智大学神学部編
P.ネメシエギ責任編集
創文社刊

偉大なる忍耐・書簡抄〔キリスト教古典叢書6〕

1965年2月25日 第1刷発行

ISBN4-423-39206-2

1993年5月10日 第2刷発行

編 集 者 上智大学神学部

編集責任者 P・ネメシェギ

訳 者 熊 谷 賢 二

発 行 者 久 保 井 浩 俊

定価 2472 円 (本体 2400円)

発 行 所 株式会社 創 文 社

本 社 〒102 東京都千代田区一番町 17-3

仮事務所 〒112 東京都文京区関口 1-44-7

電話 03-3235-4361

Printed in Japan

著作権者との申し合せにより検印省略

暁印刷・鈴木製本

緒言

キプリアヌス、詳しくは、タスキウス・ケキリウス・キプリアヌス (*Thasius Caecilius Cyprianus*) は、紀元二〇〇年ごろ、北アフリカの、今日チュニジアと呼ばれている地方に生まれた。かれの両親は富裕だったので、かれは当時の最高の教育を受けることができた。学業を終えてから、修辞学の教師と弁護士になった。そして、アフリカの首都であるカルタゴの社交界で、多くの有名人と交際し、人々の尊敬の的になった。しかし、多くの名譽と富に囲まれながらも、キプリアヌスは心の空虚さを隠しきれず、ついにキリスト教の研究に専念しはじめた。そして、二四六年に受洗し、一心に福音のおきてに従うようになった。自分の財産のほとんどすべてを貧者に施し、世俗的な学問に仕える代わりに、聖書とキリスト教著述家の研究に没頭した。信徒の数こそ多くはなかったが、当時キリスト教はローマ帝国の一州であるアフリカでも、順調な発展をとげつつあった。そのため、カルタゴのキリスト信者たちは、善良で学識ある一人物を得たという喜びにひたりながら、回心後二年にもならないキプリアヌスを、カルタゴの司教に選出した。キプリアヌスは、燃え

るような熱意をもって、司教職の遂行にあたった。しかし、二五〇年のデキウス帝の恐るべきキリスト教徒迫害のために、その職務を一時断念しなければならなかった。デキウス帝は、キリスト教を撲滅しようとして、ローマ帝国領内の全住民に対し、ローマの異教の神々に犠牲をささげるよう命じた。この命令を拒絶したキリスト教徒たちは、獄に投ぜられ、恐ろしい拷問を受け、その多くは殺害された。キプリアヌスは、迫害の間、カルタゴからのがれ、身を隠した。二五一年、ようやく迫害の嵐がおさまったとき、キプリアヌスはカルタゴに帰ることができた。しかし、まだ平和は訪れなかった。当時教会内部には分裂が起こり、さまざまな分派が生じていた。カトリックの司教たちの間にも、異端者の手によって受洗した者がカトリックに改宗する場合、ふたたび洗礼を授けるべきかどうかという神学上の問題について激しい論争がかわされていた。こうした論争は、キプリアヌスの心を非常に悩ませる結果にはなったが、一方かれはさまざまな著作によって、キリスト教徒の信仰と良習を強化向上させることを忘れなかった。かれはキリスト教徒の信仰と道徳に関する種々の問題について、数多くの簡潔な論文や書簡を残した。これらの著作から、かれが円熟した人格の持ち主で静かな平和を愛する人であったことがうかがわれる。その全人格はキリスト教の信仰と愛によって貫かれ、神の光荣と人々の救霊のために、正しい

心をもつて、イエズス・キリストとその教会に奉仕することのほかには、何も求めなかった。かれの死は、こうした美しい生涯にふさわしいものであった。ヴァレリアヌス帝によって新たに始められた迫害の嵐の中に、紀元二五八年九月十四日、カルタゴの近郊で輝かしい殉教をとげた。その殉教録は、そこなわれることなく今日まで伝えられている。その最後の部分には次のようにしるされている。

「九月十四日の朝、総督ガレリウス・マキシムスの命によって、大群衆がセクストゥスの別荘に押し寄せた。一方同総督は、これと同日に、キプリアヌスを自分のもとに連行するように命じた。

総督ガレリウス・マキシムスは、キプリアヌス司教が連行されて来たとき、『タスキウス・キプリアヌスとはおまえか』と尋ねた。

キプリアヌス司教は、『そうです、わたしです』と答えた。

総督は言った、『おまえは、不敬な者どもに加担してかれらの司教になったのか。』

『はい、そうです』、キプリアヌス司教は答えた。

総督は言った、『至聖なる皇帝がたは、おまえがいけにえをささげるよう命令されておられるのだ。』

『そうするわけにはまいりません』、キプリアヌスは答えた。

ガレリウス・マキシムスは言った、『自分の身のためだ。よく考えてみよ。』

キプリアヌスは答えた、『あなたは、自分に命じられているとおりにおやりなさい。これほど明瞭なことをいまだに愚考するにもおよびますまい。』

ガレリウス・マキシムスは、議員たちと評議し、不承不承次のような判決を下した。『おまえは、ながい間背神的な精神をもって暮らし、多くの不敬な共謀者どもを集め、ローマの神々と神聖な宗教に敵対してきた。いつくしみ深くいとも神聖なる皇帝、ヴァレリアヌス・アウグストゥス陛下、ガリエヌス・アウグストゥス陛下、また、いとも尊くあらせられるヴァレリアヌス・カエサル陛下も、おまえをみずから信奉される宗教にたち返らせることはできなかった。したがって、おまえが、最も邪惡な罪業の発頭人、扇動者であることが判明した。そこでおまえは、おまえの罪によってかり集められた者どものよいみせしめとなるのだ。おまえが血の罰を受けることによって、この国のおきてを固めるのである。』こう言って、総督は最後に、板に書かれた判決文を読みあげた。『タスキウス・キプリアヌスは、剣によって処罰さるべし。』

キプリアヌス司教の答えはただ一言、『神に感謝いたします』ということばであった。』

多くのキリスト教徒たちは、「われわれもかれとともに斬首されましよう」と叫びながら、処刑場までキプリアヌスの後に従った。キプリアヌスはそので、しばらくひざまずいて祈った後、平然として死刑執行人の剣を受けた。こうして気高い殉教者の魂は、そのふるさとの神のもとに帰った。

『偉大なる忍耐』

ここに訳出したキプリアヌスの著作、『偉大なる忍耐』(*De Bono Patientiae*)は、二五六年に書かれている。この著作については、キプリアヌス自身、その書簡(七三)の中で言及している。異端者の洗礼の有効か無効かをめぐって、激しい論議がかわされていた当時、キプリアヌスは、自分のもとにある司祭や信徒たちを平和と一致に呼びもどすことを目的として、忍耐に関するこの短い牧会書簡をしたためた。しかしかれは、この中では、論議されていた洗礼の問題について何も述べていない。というのはかれがこの書簡で直接に意図したのは、人々の心の平和を得るということだったからである。そして、もし人々の心の中に平和が宿るならば、論争の平和的な解決も容易であろうと、間接的に議論の解

決を望んでいたのである。

キプリアヌスのこの著作は、他の有名なアフリカのキリスト教著述家、テルトリアヌスの著作『忍耐について』の影響が見られるが、かれは、それを自己流にまったく変化させてしまっている。すなわち、この中にはかれの特質である迫力、熱情、さらにまた聖書についての深い知識などが、全巻にみなぎっているのである。

キプリアヌスばかりでなく、かれの書物を読む人々もすべて聖書に精通していた。そこで、われわれがこの書簡を読む場合に必要なことは、キプリアヌスがたえず引用する新約および旧約の聖書をかたわらに置いて、常に参照できるようにしておくことである。

キプリアヌスのこの著作は、キプリアヌスの心を知ろうとする者に、かれの心のとびらを開き、その中を最もはっきりと見せてくれるものである。そしてかれがその全生涯の間、あれほど多くの戦いと困難のうちにありながら、絶えず実践してきた忍耐が、かれの心にどれほど深く根をおろしていたかを読者に伝えずにはおかない。

キプリアヌスの書簡

アフリカで最も重要な司教座を受け持っていたキプリアヌスは、その任務上、当然多くの書簡をしたためた。それらの書簡は、偉大な殉教者でありすぐれた司教であったキプリアヌスのものとして、古くからまとめて丁寧に保存されていた。今日まで伝えられているキプリアヌスの書簡集には八一の書簡が載っている。このうちキプリアヌス自身の書いた書簡は六五で、他はキプリアヌスが受けた書簡である。キプリアヌスの書いた書簡は、個人的な書簡として書かれたものではない。したがってキプリアヌスの書簡は、ヒエロニムスやアウグスチヌスの書簡の中に見られるような人間みや親しさをあまり感じさせない。それはすべて、キプリアヌスが自己の司教職を遂行するために書いた、公的なものである。しかし、熱烈な心の持ち主であったキプリアヌスは、そうした公的な書簡をも、冷たい事務的なものにおわらせはしなかった。キプリアヌスの書簡には、かれの熱い信仰と愛がにじみ出ており、神とキリストの光栄、教会の一致、人類の救い、自分にゆだねられた信者の群れの救いを激しく望み、そのために働くひとりの司教の愛に燃えた心がうつし出されているのである。

キプリアヌスの書簡の多くは、現代とははるかにかけ離れた過去に起こった問題を論じているので、今日のわれわれにとって親しみはうすいが、その中のいくつかはキリスト信

者にとって永遠に変わらぬ問題を取り扱っており、われわれにとってもきわめて有益な書簡である。ここに選んで和訳した七つの書簡は、キブリアヌスの司教生活のさまざまな時期に書かれたものであるが、その中心的主題は殉教である。殉教は、あらゆる時代の、あらゆる国のキリスト信者にとって重要な問題である。日本でもキリシタン禁教令の出た一六世紀、キブリアヌスの描写した迫害のあらしがキリシタンを襲い、キリシタンはキブリアヌスの賞賛した堅忍の徳をもつて迫害を堪え忍んだ。現代でも、キリストを信ずる人々は多くの国で迫害されているのである。しかし、肉体の拷問による迫害が行なわれていない所でも、キリストのために苦しみを受けないですむキリスト信者はひとりもない。聖パウロも、「キリスト・イエズスにおいて敬虔に生きようとするものは、迫害を受けるであらう」(二テモテ三の一二)と言っている。剣の迫害よりいっそう警戒しなければならぬ。このような迫害をたびたび経験している今日のキリスト信者は、キブリアヌスの熱烈なことばから、こうした迫害に負けないために必要な勇気をくみとるであらう。

キブリアヌスの著書を読めば、ヒエロニムスがキブリアヌスについて述べた次のことばが妥当であることをだれしも認めるであらう。

“Beatus Cyprianus, instar fluminis purissimi, dulcis incedit et placidus.”〔聖キ
プリアヌスは、清い川の流れのように、快く静かに進む〕。(Epistola, 58, 10)

われわれはこの静かな清い流れの水を日本の読者にもくみとっていただくため、キプリ
アヌスの著作を本叢書の第六巻に載せることにしたのである。これによっても、古代教会
の有名な詩人プルデンチウスの述べた次のことが実現するのではなからうか。

“Dum genus esse hominum Christus sinet et vigere mundum,

Dum liber ullus erit, dum scriinia sacra litterarum,

Te leget omnis amans Christum,

Tua, Cypriane, discet.”

（人類が生き続け、世が栄えること、キリストがそれを許されているかぎり、

一冊の書物でも、一つの書架でも存在するかぎり、

キプリアヌよ、キリストを愛するすべての人は、あなたの書物を読み、

あなたに教えられるでしょう。〕(Peristephanon, 13, 5, 6-7)

翻訳の台本はハルテル (Guilelmus Hartel) の校訂本 (Corpus Scriptorum Ecclesiasticorum Latinorum, 第三卷第一部三九七—四一五ページ)、およびフルター (H. Hurter) S. Caecilii Cypriani epistolae selectae, Oeniponti 1878 を使用した。

Migne の Patrologia Latina では、本書は第三卷および第四卷に載っている。

昭和三九年二月三日

編集責任者 P・ネメシエギ

目次

11

偉大なる忍耐⁽¹⁾

